

観
世
流

緑泉会

Kanzeryu Nob-Theatre Ryokusenkai

平成31年 第1回例会

2.11 [月祝] PM 1:00~ (開場 12:00)

喜多六平太記念能楽堂

能……
狂言……
長光
Naganatsu
能……
弱法師
Yowabishi

大藏吉次郎
中所 宜夫

能……
羽衣
Hagoromo

河井 美紀



能 羽衣 天女 河井 美紀
漁夫白龍 野口 能弘
大鼓 原岡 一之 太鼓 林 雄一郎
小鼓 幸 信吾 笛 寺井 宏明

後見 墨 野口 琢弘
漁夫 吉田 祐一

後見 中野 敬子
墨 宜夫

道通 筒井 陽子
目代 中森健之介
宮本 杉澤 陽子
昇 真太郎 鈴木 啓吾

【休憩十五分】

狂言 長光 スッパ 大藏吉次郎
道通り 榎本 元
目代 宮本 昇

仕舞 老松 敬子
大実盛 津村禮次郎
大江山 キリ 杉澤 陽子
地謡 中森健之介
中森 鈴木 啓吾
貫太 貫太 真太郎

【休憩十分】

能 弱法師 中所 宜夫
高安通俊 大日方 寛
大鼓 柿原 孝則
通俊ノ下人 大藏 教義 小鼓 飯田 清一 笛 松田 弘之

後見 河井 美紀
中森 貫太
地謡 菅野 貞男
吉留 敬高 鈴木 啓吾
中森健之介 永島 恒治 充

附祝言 【終了予定 午後四時三十分】

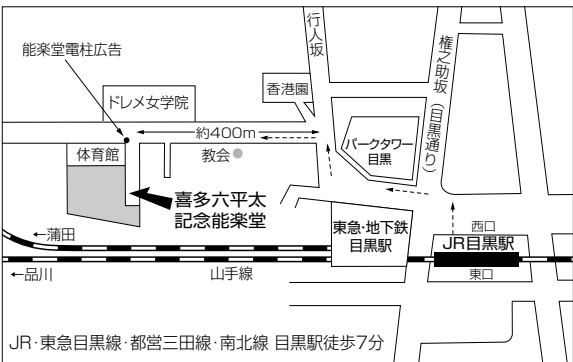
許可のない録音、撮影は一切禁止です。携帯電話は電源からお切り下さい。
演能や他のお客様の迷惑となる行為は、ご遠慮願います。場合によっては退場頂く事もございますのでご了承下さい。

2019. 2. 11 [月祝] PMI:00 (開場 12:00)

喜多六平太記念能楽堂

〒141-0021 品川区上大崎 4-6-9 TEL 03-3491-8813

JR、東急目黒線、地下鉄三田線・南北線の目黒駅西口より徒歩7分。
香港園手前の道を左折し約400m直進、杉野学園体育館手前を左に入る。
※駐車場がございませんので、お車でのご来場はご遠慮下さい。



●入場料
会員券 (年 4 回) ……一般 20,000円 学生 10,000円
1 回券 (当日券) ……一般 6,000円 学生 3,000円

●申込先: 各出演能楽師または緑泉会まで
河井 美紀 TEL 050-7129-2077
中所 宜夫 TEL・FAX 042-550-4295

緑泉会 〒184-0005 東京都小金井市桜町 2-7-18
tel. 042-386-2131 fax. 042-386-2132

能 羽衣 (はごろも)

春の早朝、駿河国三保の浦に漁夫白龍(はくりよ) (ワキ)は漁をしている。春風がのどかに吹き抜ける穏かな美しい情景が描かれる。白龍が漁を終えて松原に上がると「虚空に花ふり音楽聞こえ、霊香四方に薫す」るたならぬ雰囲気が漂っている。見れば美しい衣が松に掛っている。衣を持ち帰ろうとする白龍をどこからともなく現れた女(メテ)が呼び止める。この女が天女で手にしている衣が天に上るための羽衣と知り、白龍はいよいよ衣に執着するが、天女の悲しむさまを見て思い直し衣を返すことにする。白龍は衣を返すにあたり「天上の舞楽」を見せて欲しいと頼むが、そのためには羽衣が必要なので先に返すよう請われる。天女の言葉を疑う白龍だったが、「いや疑いは人間にあり。天に偽りなきものを」と言われて、自分を恥じて衣を返す。

衣をまとった天女は、三保の松原が天上界につながる美しい場所であると讃えながら舞い始める。舞はやがて言葉や舞を離れて序之舞(囃子)だけで演奏されるゆつたりした舞で最初の足使いが特徴となり、さらに破之舞(軽快な流れに乗った囃子の演奏)と進み、最後は「七宝充滿の宝を降らし」て富士の彼方へ昇って行く。古典として伝えられる現行の曲の中で、最もよく知られた美しい曲の一つ。世阿弥かその周辺の作者の作と考えられる。

狂言 長光 (ながみつ)

立派な刀を携えた者(アト)が訴訟を終えて故郷への土産を探しに市へやって来ると、その刀を狙うスッパ(メテ)にからまれる。二人が争っているところに目代(メアト)が仲裁に入り、二人に事情を尋ねるが、スッパは大声で話す男の言葉を盗み聞き、同じように答える。それに気付いた男は…。

仕舞 老松 (おいまこ)：筑紫太宰府に道真を慕って追って来た老木の追い松の精が、都からやって来た信者の前に姿を現わし、長寿を授けられた神託を伝え祝いの舞を舞う。

實盛 (きり(まもり))：平家の侍齋藤別当實盛は白髪を墨で染め篠原の合戦に臨み、木曾義伸の手勢、手塚太郎光盛に討たれた。その幽霊が遊行上人の前に現れ、戦場の有様を見せ供養を頼む。大江山 (おおえやま)：丹波国大江山に住む酒吞童子は、自らを退治しに来た源頼光一行に酒を飲まされ眠り込んでしまう。酔うに従って乱れてゆく童子姿の鬼の様子を舞う。

能 弱法師 (よるぼし)

撰津国高安の里の通俊(ワキ)は讒言に惑わされ、ひとり子の俊徳丸を勘当した。春浅い梅の花の咲き誇る頃、通俊は我が子の安寧を祈願するため天王寺で七日間施行する。満願の日、天王寺界限で噂の弱法師(メテ)が施行を受けに来る。不孝の罪の報いで盲目となった無惨を嘆き、仏の導きを頼りに暮している。通俊が声をかけると気の利いた受け応えが返ってきて、思わぬ教養の高さに驚かされる。折から散りかかる梅花を「梅の花」などと口にするれば、「この難波の地であれば、ただ木の花と言えば良いものを」と無粋を咎められて、ふと気づけば、ここは聖徳太子建立の四天王寺で、仏法の恵みに溢れた地、鐘の音が響き静寂に包まれたかと見れば、弱法師は他ならぬ我が子俊徳丸ではないかと、忽然と知らされる。

名乗ろうと思うが人目をはばかり夜を待つことにする。折から入り日が水平線にかかろうとし、通俊は弱法師に日想観を勧める。入り日に向かって行う天王寺独特の観想法は、盲目のはずの弱法師に返って速く景色までをも鮮やかに見せ、難波の浦からの東西南北を描き出す。しかし弱法師が見ている情景は周りの人々には見えない。参詣の人々になぶつかって転び、杖を取り落としそうになりながら、現実に戻って自分の有様を恥じる。そして夜も更けてそれぞれ名乗れば、寺の鐘が祝福するように響き、二人は連れ立って高安の郷へ帰って行く。

世阿弥の跡を継ぐも三十半ばで急死した十郎元雅の代表作。

●平成31年第2回例会：4月20日(土)

能 …… 卷 絹 …… 杉澤 陽子
能 …… 自然居士 …… 坂 真太郎